九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

呉語小説における内面引用

中里見，敬
九州大学大学院言語文化研究院 ： 助教授 ： 中国文学

https://hdl.handle.net/2324/5560

出版情報：『呉語読本』音声データの作成と公開. 論文・翻訳編（第一冊）, pp.31-37, 2004-03-01. 九州大学高等教育総合開発研究センター
バージョン：
権利関係：

平成 14-15 年度 科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）

研究成果報告書

『呉語読本』音声データの作成と公開

論文・翻訳編（第一冊）

（課題番号 14510491）

平成 16（2004）年 3 月

研究代表者　**石 汝 杰**

（九州大学　高等教育総合開発研究センター）

呉語小説における内面引用

中里見 敬

0. はじめに

本稿では、呉語小説において作中人物のセリフが呉語で表されるにもかかわらず、同一人物の内面の思考は呉語ではなく官話で引用されるという現象を指摘し、考察を加える。

本稿は、平成 14-15 年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(2)「『呉語読本』音声データの作成と公開」（石汝杰代表、課題番号 14510491）による定期的な読書会による成果であるとともに、筆者のナラトロジー・自由間接話法研究の一環でもある。*1

1. 問題の所在

清末、上海が出版の中心地になると、呉語で書かれた小説が多く刊行されるようになる。しかし、ひとくちに呉語小説といっても、『海上花列伝』(1892-1893)では語りは官話、セリフは呉語であるのに対して、『九尾亀』(1906-1910)は妓女は呉語を話し、嫖客は官話を話すというように、その文体は一定していない。

本稿で考察の対象とした『海上花列伝』、『九尾亀』、『九尾狐』という三つの呉語による狭邪小説において、興味深いことに内面の思考は呉語ではなく官話で引用されている。セリフよりも思考こそ個人のより本質的な部分であると考えるなら、呉語話者は呉語で思考すると想像したくなるが、呉語小説における作中人物の内面思考は実は官話によって引用されているのである。この事実は、小説における内面引用に関して何を示唆しているのだろうか。

2.『海上花列伝』(1892-1893)

『海上花列伝』の次の例は、「暗想」という伝達詞に続いて、趙樸斎の内面がやや文言調の官話によって間接的に引用されている。

樸齋暗想此刻。逕去覆命。必要説我不會幹事。不若且去王阿二家。重聯舊好。豈

*1 本稿は、別に執筆中の論文「語られた内面から透明な内面へ：五四以前の白話小説、呉語小説、文言小説における内面引用のモード」（仮題）の一部をなす予定である。

不妙哉。（第 37 回）*2

［樸斎は、いままっすぐ帰って報告すれば、きっと能なしだと言われるから、さきに王阿二のところに寄って、かの女とよりを戻そうと考えた。］

次の例は、匡二の内面がかなりまとまった分量で引用される場面である。「料道」、「心中却想」、「又想到」、「再想到」とくりかえし引用のマーカーが用いられたあと、最後の引用「四老爺背地做得好事。我偏要去戳破他。看他如何見我」は伝達詞の欠如した自由直接話法の形式となり、末尾に引用終了のマーカー「主意已定」がおかれている。ここでも引用された内面はすべて官話となっている。

棧使送上兩張京片。匡二看時。係陳小雲請两位主人。於明日至同安里金巧珍家喫酒的。尚不要緊。且自收藏起來。料道大少爺通宵大賭。四老爺燕爾新歡。都不回來的了。竟然關門安睡。心中却想潘三好事將成。偏生遇這寃家冲散。害得我竟夕悽惶。又想到大少爺搳了許多洋錢。在楊媛媛身上。反不若潘三的多情。再想到四老爺打着這野鷄。倒搨了個便宜貨。此時不知如何得趣。顛來倒去。那裡還睡得着。由想生恨。由恨生妬。四老爺背地做得好事。我偏要去戳破他。看他如何見我。主意已定。（第 27 回）*3

［ボーイが二枚の名刺を持って来た。見るとそれは、陳小雲がふたりの主人に対し、明日、同安里の金巧珍の家へおいでを請う、というもので、急ぐわけでもないから、ひとまず、しまっておくことにした。そして、若旦那は夜通し賭博だろうし、四老爺（李実夫）は新しいお気に入りと熱々だろうから、どちらも帰ってくることはないだろう――と考え、ドアをしめて床についた。しかし胸の中では、潘三と、もうひと息というところで、あいにく、あの憎い奴にじゃまをいれられ、こうして味気ない一夜をすごさなければならなくなった、と考え、さらにまた、――若旦那は楊媛媛にさんざん入れ揚げているが、潘三のほうがよっぽど情がある。――四老爺はあんな野鶏（ヤチ）を見つけて、安物を手に入れたようだが、いま時分、どんなに楽しいことだろうな。転々、寝返りをうって、いっこうに寝つかれない。しだいに実夫が憎くなり、さらに羨ましくなって、――実夫はこっそり、いいことをしている。どうあってもばらしてやって、おれに合わせる顔があるかどうか、見てやろう、

*2 『海上花列伝』（『古本小説集成』上海：上海古籍出版社，刊行年未記載。拠光緒二十年石印初刊本影印）第 37 回 34 葉a面、523 頁。句読点は影印本により、呉語の部分には傍点を付した。また、内面引用の伝達部は□で囲み、被伝達部には傍線を付す。“道”に導かれた直接話法によるセリフの部分には引用符号「　」を補う。引用のしかたは以下同じ。日本語訳は、太田辰夫訳『中国古典文学大系 49 海上花列伝』（東京：平凡社，1969）304 頁による。ただし、一部改訳した箇所がある。

*3 『海上花列伝』第 27 回 18 葉b面―19 葉a面、376―377 頁。太田訳 221 頁。ただし、一部改訳した箇所がある。

と腹をきめた。]

もう一例、呉語のセリフにはさまれた内面の引用を見てみる。

管家等鶴汀下了轎。打千禀道。「倪大人接著電報轉去哉。就不過高老爺來裡。請李大少爺大觀樓寛坐。」鶴汀想道。齊韻叟雖已歸家。且與高亞白商量。亦未爲不可。遂跟管家。款歩進園。一直到了大觀樓上。謁見高亞白。鶴汀道。「耐一幹子阿寂寞嘎。」亞白道。「我寂寞點。勿要緊。倒可惜個菊花山。龍池先生一番心思哚。故歇一逕閒煞來浪。」(第 60 回)*4

[執事は鶴汀が駕籠からおりるのを待ち、片膝ついて礼をすると、「うちの主人は電報が来ましてお帰りになられました。いまおられるのは、高さまだけです。ともかく、大観楼でお休みください」鶴汀は考えた。――斉韻叟は家に帰ったと言うが、高亜白に相談しても悪くはなかろう。そこで執事のあとから庭園にはいり、大観楼に着くと、高亜白に面会した。鶴汀、「あなたひとりではお寂しいでしょう」「わたしは寂しくてもかまいませんが、竜池先生ご苦心の菊花山は、惜しいことに、だれひとりとして見るものも、ありません」]

執事のセリフは、前半が呉語(語彙的には倪=我們、轉去=回家去、來裡=在など。官話に直すと「我們大人接了電報,就回家去了,只有高老爺在。」となろう)、後半はやや文言調の客套語(「請李大少爺大觀樓寛坐」)になっている。続く鶴汀の内面の思考が官話で引用されたあと、李鶴汀と高亜白の会話は再び呉語に戻っている。

3. 『九尾亀』(1906-1910)

『九尾亀』の次の例は、妓女・沈二宝が妓楼のやりて婆・金姐から借金を取りたてられる場面である。

沈二寶聽得金姐的口風甚緊。心上更覺着急。暗想如今世上的人。真真是世態炎涼。不堪回首。前兩年自己生意狠好的時候。就是一個大錢也不給他。都不要緊。就是這個金姐。平日之間。也不知受了自己的許多禮物。佔了自己的無數便宜。如今却這樣的反面無情。逼迫得這般利害。想着不覺嘆一口氣。便又對着金姐。懇懇切切的説道。「嫵姆格待倪一逕勿錯。倪只要有法子想。洛裏肯實梗樣式。故歇實在一個銅鈿才嘸撥來裏。只好請嫵姆停脱格一兩天。等倪到外勢去想法子。……」(第 163 回)*5

---

*4 『海上花列伝』第 60 回 26 葉b面、844 頁。太田訳 487 頁。ただし、一部改訳した箇所がある。

*5 『九尾亀』(『古本小説集成』上海:上海古籍出版社,刊行年未記載。拠上海交通図書館石

［沈二宝は金姐の口調がきついのを聞いて、ますます気持ちがあせり、心中ひそかに思います。今の世の中の人は、まさに金の切れ目が縁の切れ目、思い返すのも忍びない。数年前、私の景気がよかったときは、たとえ一文も払わなくても、たいしたことないっていう態度だったのに。この金姐ときたら、ふだん私からどんなにたくさんの贈り物をもらい、私からどれだけうまい汁を吸ったかしれないわ。それなのにいま、こうして手のひらを返したように情け容赦なく、こんなに厳しく取り立てを迫るなんて。そう思いながら、思わずため息をつくと、また金姐に対して、ねんごろに言います。「お母さんは私にずっとよくしてくれました。私に手だてが見つかりさえすれば、どうしてそのようなことを頼んだりするでしょうか？　いま本当に一銭もないので、お母さんにしばらく待ってもらうしかありません。私が外へ出かけて手だてを見つけたら……」］

沈二宝の内面は「暗想」以下に官話で引用されている。それに対して、「懇懇切切的説道」以下に見える沈二宝のセリフは、作中人物自身の声が直接話法で呉語のまま引用される。

語り手が作中人物の内面やことばを媒介するという現象は、あたかも西洋諸語における間接話法のような形式を招来することになる。次の傍線部は、語り手が沈二宝の発話をそのまま直接話法で再現するのではなく、間接的に要約して引用する例である。そして注目すべきことに、このセリフの間接引用も呉語ではなく、官話となっているのである。

沈二寶便把<u>潘侯爺的性情。專愛能坐自行車的女人。和自己昨日心中的意思。要想在潘侯爺身上。弄他一筆大錢</u>。宛宛轉轉的。和金姐説了一遍。（第 163 回）*6

［沈二宝は、潘侯爺の性格が自転車に乗れる女ばかりを好きになること、そして自分が昨日心に思っていたこと、つまり潘侯爺からまとまった金をまきあげようということを、金姐にひとしきりやんわりと話しました。］

語り手が作中人物の発話を要約して間接的に引用する部分と、語り手が作中人物の内面を引用する部分とが、ともに呉語ではなく官話になっていることは、次のことを示唆している。

作中人物のセリフが直接話法で引用される場合、その被伝達部は語り手の支配から解放され、作中人物の声を直接的に反映することができるため、呉語のセリフが現れる。一方、作中人物の内面は、たとえ「想道」といった引用のマーカーに導かれてい

印本影印）742 頁。句読点は石印本によった。日本語訳は中里見による。石汝傑『呉語読本：明清呉語和現代蘇州方言』（東京：好文出版，1996）も参照。

*6 『九尾亀』742 頁。

たとしても*7、語り手の媒介から独立することができず、語りの地の文と同じ官話文体によらざるをえない。言い換えると、呉語小説における内面引用が呉語ではなく官話になっているのは、それが直接話法ではなく間接話法であるからである。

4. 『九尾狐』(1908-1910)

前節で述べたことをもう一つの呉語小説『九尾狐』によって確認しておく。なお『九尾狐』も『九尾亀』と同様、基本的に妓女は呉語を話し、嫖客は官話を用いる。

次の例は、妓女・胡宝玉の内面の引用である。その直前まで胡宝玉は銭慕顔と呉語で会話をしていたにもかかわらず、「暗想」という伝達部に続く思考は官話となっている。

> 慕颜道:“唔节浪开销要多少啦?”宝玉道:“统统才勒嗨,终要二三千笃。”慕颜道:“二三千还勿多,勿要紧,勿要紧!唔肯住过初十,我送唔三千银子,唔有啥勿放心啦。”宝玉一听，正中下怀，暗想：慕颜这个人与我初次会面，就肯送我三千银子，虽是为着女色面上，也可算得慷慨之人。我今番果然来得着也，住过初十，便可优游回转申江，从容度节了。故向着慕颜满口应承，称谢不置。（第 33 回）*8
>
> ［慕顔がいう、「あんたは中秋節の返済にいくらいるのかね？」宝玉はいう、「すべてひっくるめて、だいたい二、三千くらいです。」慕顔はいう、「二、三千ならたいしたことはない、大丈夫、大丈夫。あんたが十日まで泊まっていくなら、私が三千の銀子をあげよう。何か心配なことがあるかね？」宝玉はそれを聞くと、我が意を得たりとばかり、ひそかに思った。慕顔という人は、私と初対面なのに、私に三千もの銀子をくれるという。女の容色のためとはいえ、気前のいい人だといえる。今回、私はやっぱりここへ来て正解だった。十日まで泊まって、それからのんびりと上海へ戻り、ゆっくりと中秋節を過ごそう。そこで慕顔に向かって二つ返事で承諾し、しきりに感謝のことばを述べます。］

次も妓女・宝玉の内面を引用した例である。ここでは引用を示す伝達動詞は見られず、地の文に引き続いて、唐突に「大约」、「幸得」といった作中人物のモダリティを表す状語が現れて、内面思考の引用が始まっている。後者では「宝玉正在心中转念」が引用終了のマーカーとなっている。

---

*7 内面引用のマーカーとして「道」が用いられることはまれであることも、間接引用であることの傍証となろう。なお、「道」と「説」の引用の機能のちがいについて触れたものに、太田辰夫『中国語史通考』（東京：白帝社，1988; 1999）290 頁、および山本明「呉趼人に見る近代の影」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊 16 文学・芸術学編，1989）131 頁がある。

*8 評花主人著、古生校点『九尾狐』（天津：百花文芸出版社，2002）328 頁。ただし、引用符号は直接話法の箇所のみとし、「暗想」以下の引用符号は省略した。日本語訳は中里見による。

于是宝玉归房，即唤管帐的上来问话。那管帐的就拿了一本皮肉帐、几包洋钿、钞票以及各店家派来的帐，上楼一一交明清楚。宝玉先将洋钿、钞票点了一点数，计共只有九百余元；再把帐簿翻阅一遍，看到总结，除几处收过外，尚少千元有零，大约他们知我出门，故未送至，否则断不会这样的。又看那所欠各店之帐，如银楼、珠宝、绸缎、洋货、菜馆等项，约须二千多元，其余零星各款，也需数百元光景，一并计算，非有三千不可。幸得我赴宁一次，早作整备，不然，势必要变卖东西，填补这个亏空了。宝玉正在心中转念，管帐的又禀道："大先生去仔半个月，格格贼倒前日捉牢格哉，……"（第 34 回）*9

［宝玉は部屋に戻ると、金庫番を上に来るように呼んで問いただします。金庫番は一冊の帳簿と、いくつかの銀貨と紙幣の包み、そしていろいろな店がよこしてきた借金証文を持って上がってきて、ひとつひとつきちんと説明します。宝玉がまず銀貨と紙幣を数えると、全部で九百数元しかありません。それから借金の帳簿をひととおり見て、最後まで見ると、いくつか取り立てたところがあるほかは、まだ千といくらか赤字になっている。おそらく彼らは私がいないのを知って、それで（借金の取り立てに）人をよこさなかったのだわ。さもなければきっとこんなはずはないわ。さらに銀のアクセサリー店、宝石店、絹織物店、輸入品店、料亭など、借金のある店の帳簿を見ると、およそ二千元あまり必要です。それ以外の小さな借金も、数百元くらい必要で、全部あわせると、三千はないといけません。寧波へ行って、早めにお金の工面をしておいて、助かったわ。さもなければ、きっとものを売って、この穴を埋めなければならないところだったわ。宝玉が心中あれこれ考えていると、金庫番が申し上げます。「宝玉さまが半月ほど出かけておられたあいだに、あの賊はおととい捕まりました。……」］

次に引くのは、内面の引用と間接話法の親和性を示唆する例である。間接話法による宝玉の発話の引用は、呉語ではなく、地の文と同じ官話になっている。

等三妾去后，方在身旁摸出一支皮洋夹来，打开拣了一拣，拿一张三千元的汇票送与宝玉，叮嘱他日后再来。宝玉极口称谢，应承来春准到此间。又说：钱老有暇，何不也到上海一游，看看洋场风景，尽不妨耽搁在我家，盘桓一两个月，以尽我孝敬之心。慕颜答应，又问航海可有风波。宝玉道："一点也无不，倪坐勒大轮船浪，平平穩穩，实头勿觉着啥，侬放胆大点末哉。"（第 34 回）*10

［三人の妾が帰ると、ようやくふところから皮の財布をとりだしあけて、三千元の為替手形を宝玉にわたし、彼女にまた来るように念をおします。宝玉は口をきわめて感謝し、来春きっとこちらへ来ます、と承諾します。さらに、銭旦那もお暇があれば、上海へ遊びに

*9 『九尾狐』336―337 頁。

*10 『九尾狐』334―335 頁。

いらして、租界の様子でもごらんください。うちに泊まって、一、二ヶ月ゆっくりされれば、私も孝敬の気持ちを尽くすことができます、といいます。慕顔は承諾して、航海は波風があるのではないか、と尋ねます。宝玉はいいます、「ちっともありませんよ、大きな船に乗れば、平穏なもので、まるで何も感じません。勇気をお出しになればいいのですよ。」〕

宝玉と銭慕顔の会話が、ここではやや文言調のまざった文白混交体で記されている。白話文における直接話法のマーカー「道」は用いられず、「叮嘱」、「应承」、「又说」、「又问」という伝達部に引き続いて、文体の調整が行われることなく、二人のセリフが間接話法で引用される。それに対して、「宝玉道」以下は直接話法による引用であり、妓女のセリフを呉語で記す『九尾狐』本来の形式にもどっている。

5. 結論

呉語小説において、セリフの引用が呉語で行われるのに対して、内面思考の引用はたとえ呉語話者の作中人物であっても官話で行われていることは、一見すると矛盾する現象のように思われる。しかし、内面思考の引用は、間接話法によるセリフの引用と同じ形式であり、作中人物の発話を直接引用する直接話法とは異なって、いったん語り手の語りと文体の媒介をへる。その結果、内面引用は呉語ではなく、語りの地の文の文体である官話となるのである。言い換えると、内面の引用はセリフ以上に、語り手の支配する秩序だった語りの内部に収まっているのである。呉語小説のセリフが方言を駆使することによって、語り手から解放された透明な伝達を可能にしたのに対して、呉語小説の内面引用は依然として語り手の語りと文体をへた間接的な再現を待たねばならなかったのである。